

ICD日本部会第22代会長 栗山純雄先生を偲んで

国際歯科学士会日本部会 第32代会長 鏡 宣昭

7月1日、また一つ大きな星を失った報を受けました。歯科界にとって、特に小児歯科界にとってかけがえのない方でした。

栗山純雄先生との出会いは、私が大学を卒業した1972年まで遡ります。小児の専門病院として知られていた「ライオンファミリー歯科センター」に入局した時で、当時の院長が栗山先生でした。入局したての私にはエネルギーでとてもまぶしい存在に見えました。

う蝕の洪水時代で小児歯科がマイナーだった当時、小児を通して医療の在り方考え方や、Dr.ビーチを中心に考案されていた4ハンドテクニックをベースとした水平位診療を確立し、その一つ一つを丁寧に指導してくださいました。これらは私にとっての一生の宝であり後世に伝承したいことのひとつと考えています。

栗山純雄先生は1959年東京歯科大学を卒業後保存修復学の講座で、当時開発されたばかりのハイスピードタービンをテーマに学位を取得されたと伺っています。その後フルブライト留学生としてボストンのフォーサイスデンタルセンターに学び、帰国後（財）ライオン歯科衛生研究所附属ファミリー歯科センター（LDC）に入局され新しい時代の小児歯科臨床確立のため精力的に活動されて来ました。海外にも多くの知

人・友人がいらして、その一人に日本部会の名誉会員だった堀内實先生もいらっしゃいました。国際大会参加後にボストンのご自宅に医局員とお邪魔したこともあり、現在も「私は小児歯科専門医です」と胸を張って言えるのも、栗山先生の教えがあったからと確信しています。

栗山先生と再びお会いする機会が巡ってきたのは、私がICDに入会させて頂いた2002年6月になります。当時、事務局長・副会長・国際理事を歴任され会長になられて2年目の総会・認証式でした。当時のフェローには、研修会や講演で拝聴するような方々ばかりで、近寄りがたい雰囲気だった記憶があります。

振り返って、大学卒業以来私の臨床人生は、常に栗山先生の影をひたすら追い続けていたような気がします。勿論先生が強要した訳でも私が意識的に追随した訳でもありません。亡くなられて初めてそうだったことに気が付かされました。栗山先生がICDの会長になられて20年後に私が同じような職を経験させて頂いたのも、必然だったのか、それとも偶然だったのでしょうか。

先生から頂いた多くの教えを後進に伝え少しでも恩返しができればと思います。

多くの功績を残され90年間の人生に幕を下ろされた栗山純雄先生のご冥福を心からお祈り致します。



図1 ライオンファミリー歯科センター内での栗山院長の診療風景（1970年初期の頃）



図2 シーラントについて国際大会でのプレゼン風景